広報 るもい
●特集 留萌海岸CCZ整備計画
平成元年8月／発行・留萌市
編集・企画 振興室
印刷・株式会社 留萌新聞社
1989
8

◆連載 いま留萌むかし 第三十二話

●黄金岬の烽火台

黄金岬。現在海のふるさと館の建っているあたりに烽火台（のろしだい）があった。

いつごろからあったものかはっきりしない。江戸時代末期の江差沖の口番所秘図、庄内藩が領地の引き渡しにつかったマシケ、ルルモッペ、トママイ三場所経界絵図や西蝦夷地場所見取図などにこの高台に烽火台という書き込みがある。江戸時代後期の寛政十年にかかれた絵図には記されていないのでそれ以降に置かれたものと思われる。

黄金岬の高台にうずたかくまきが積まれ、夜になるとそれに火がいれられた。夜の暗闇の中にその明かりだけがこうこうと輝き岬から海を照らしていた。沖ゆく弁財船の男たちは岬に燃える炎を見て自分たちが安全に航海していることを知った。

江戸時代後期になると蝦夷地の奥場所の開拓が進み、それにともなって奥地場所の産物がふえ、松前や江差と奥地を行き交う船が多くなった。そのため、各地の船の泊地には海上交通のためのいろいろな施設が築かれたらしい。黄金岬の烽火台もこの一つである。特に江戸時代初期から後期にかけては、奥地の交易にはアイヌの人たちがつかっていた縄綴り船がつかわれていた。この船は小さなもので物資の運搬もかぎられていた。しかし、場所請負制が進み、多くの産物が出されるようになると、場所を請け負っている商人たちは自分の持っている大きな弁財船をじかに自分の請負場所にむかわせることとした。

ルルモッペ場所も例外ではなかった。ルモイ川の河口は七、八百石積みの弁財船が停泊するようになり、本州の北前航路の各湊とおなじような役割を果たすようになっていった。ルモイ川の河口は弁財船の湊としての機能を果たさざるをえなかったのである。そのためこの黄金岬の高台が航海の安全のための烽火台としてつかわれたのである。

また、本州のかつての北前航路の各湊にある日和山（ひよりやま）とおなじようにこの高台がつかわれた。日和山とは弁財船で航海するときに、出向に良い風向きを調べたり、航行に良い天候を見る場所である。とくに、弁財船は帆走が唯一の航行方法だったことと、嵐に弱い構造を持っていたっことなどから、風の方向や強さなどをみることは最も重要なことであった。このため各地の弁財船の寄港地にはかならず日和山と烽火台があったといっても過言ではない。

この由緒ある黄金岬の高台に昭和二十七年に故高橋九一翁により、私財六十万円を投じて、高橋灯台がつくられ留萌港に入港する船舶の目印となった。昭和四十一年に現在の留萌灯台（塩見町高台）ができてその使命をおえたが、高橋翁を記念して、ふるさと館の横にミニチュアの灯台が復元されている。

そして、これからの留萌丸の航海の目印として海のふるさと館が現代の烽火台としての役割を果たしていかなくてはならないのではないだろうか。

三場所経界絵図の中の烽火台